

---

**高麗時代における「被帽地藏」の図像受容に関する考察**  
**—対馬伝来・九州国立博物館像の位置づけをめぐって—**

---

本発表は、朝鮮半島の高麗時代（918～1392）に流行した「被帽地藏」、すなわち頭巾を被った地藏菩薩像の図像受容の問題を、対馬に伝来し、現在九州国立博物館所蔵の金銅被帽地藏菩薩遊戯坐像（以下、対馬像とする）に焦点を当て考察を試みるものである。対馬像は、本体と台座を一鑄した全高約 50 センチの金銅仏であるが、頭巾を被り、両手にそれぞれ宝珠を執る図像は珍しく、朝鮮半島のみならず中国にも例を見ない。ここでは、この対馬像の①制作年代、②図像の受容経路、③高麗彫刻史上の位置、の3点について考えてみる。

まず①制作年代である。対馬像は、これまで高麗後期から朝鮮前期（14～15 世紀）の作品と推定されてきた。その根拠は、「被帽地藏」の現存作例が高麗後期の仏画に集中し、また、15 世紀後半と考えられる禅雲寺像と形式上多くの共通点を見せるためである。しかし、対馬像の特徴、つまり上脛を膨らませた眼や唇を引き締めた量感豊かな頬、そして首が長く細身の体軀などは、南宋・元の影響を受けた高麗後期～朝鮮前期の作例にみられる特徴とは大きな違いが認められる。そこで改めて像の年代を検討するため、台座の形式や文様などを在銘の石塔や浮屠のそれと比較した。その結果、それらは高麗・10 世紀後半～11 世紀後半の作例に極めて近似することが認められ、穆宗代（997～1009）には、すでに十王像が造立されており、「被帽地藏」の図像伝来時期も 10 世紀末を上限とすることができるだろう。

次に②図像の受容経路である。東アジアにおける「被帽地藏」の現存地域と時代を整理すると、四川、敦煌では唐末五代・北宋、山西では五代、雲南では大理（937～1254）、隣国の日本には平安後期（12 世紀）にみられる。「被帽地藏」は 900 年前後に四川で造像が始まり、中原よりも長江流域で流行した。従来は、高麗が元に服属した 13 世紀後半に、吐蕃僧の来朝により中央アジアの図像がもたらされたと考えられていたが、この時期四川、敦煌では流行していない。また、中原と朝鮮半島を繋ぐ、遼河を中心とした契丹地域に「被帽地藏」が現存しないことを念頭に置けば、その経路はむしろ、契丹を警戒するために江南航路を通り、使節や僧侶が往来した北宋との交流のなかで長江流域の図像が受容された可能性が高いのではないだろうか。

最後に、以上の考察が認められるなら、③対馬像は 10 世紀末から 11 世紀後半までに制作された朝鮮半島現存最古の「被帽地藏」として位置づけられる。また精緻な造形や技法、そして『十輪経』に基づく初唐の図像（両手宝珠）を復古させるなど、思想が正確に反映されている。これらから、本像は、いまは現存しない都の様式、つまり「開京様式」を示す王室周辺の造像として高麗彫刻史上特に重要な作例と位置づけられ、ひいては、高麗を中心とした東アジアの仏教図像交流史に新たな視点を加えることができよう。